「日々の理科」（第 4054 号） 2025,-9,14

「能登半島の今（３）」

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所

田中　千尋　Chihiro Tanaka

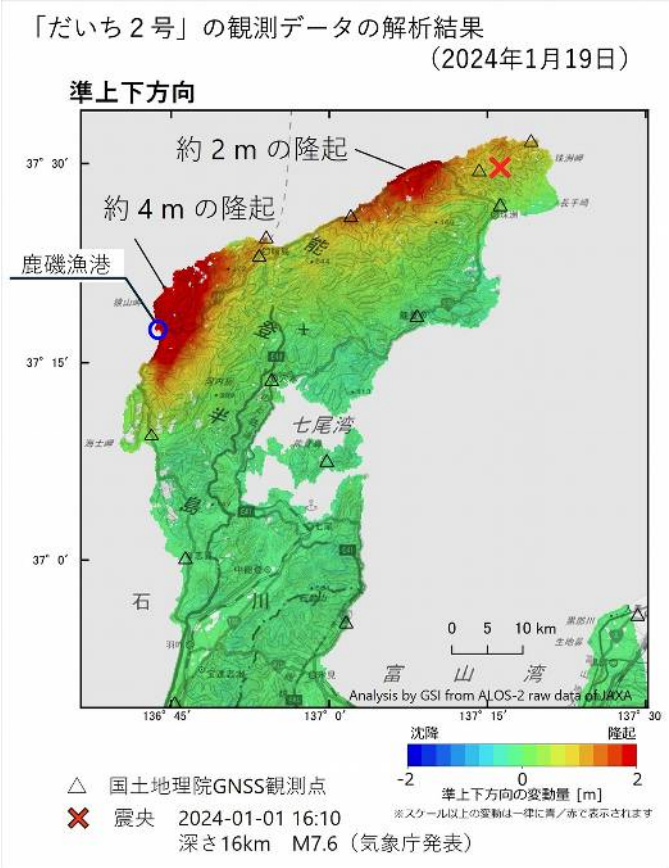
今回の能登半島訪問の最も重要な目的は、震災による地殻変動、特に能登半島北側の海岸地帯の隆起の状況です。

1923 年 9 月に発生した関東大震災でも、一部の地域に土地や海底の隆起が起きました。有名なのは江の島（神奈川県藤沢市）南岸での隆起でしょう。その数値は論文によって幅がありますが、およそ 0.7m～2m の間とされています。

ところが 2024 年 1 月の能登半島地震では、半島北西部で最大 4m の隆起が観測されているのです。これは、日本ではっきりと記録が残っている地殻変動史では最大のものです。

もともと海岸の汀線（波打ち際）にあった波消しブロックも、今はかなり内陸側に取り残されています。その表面に残された縞模様は、かつての海面高を示す証拠の一つです。写真では小さく見えますが、このテトラポットは高さが 6m ほどあります。

半島の北部の海岸でも、倒壊した家屋がまだそのまま残っています。地震そのものによる倒壊なのか、その後の津波によるものかは判別できませんでした。



（気象庁資料）

震災による隆起の状況は、気象庁が震災から 18 日後に発表したこの図が大変わかりやすいです。輪島市の西側の海岸から、能登半島先端の狼煙（のろし）漁港にかけて、隆起が顕著なことがわかります。

中でも最も隆起が激しかったのが、半島北西部に位置する「鹿磯漁港」付近です。約 4mの隆起が観測されています。これは、ヒトの一生の中で起きる地殻変動としては、並外れた大きさと言えます。

その鹿磯漁港を訪ねました。ここは震災後の報道で

何度も放映された場所の一つです。震災前は多くの漁船や、積み込みのトラックなどで賑わっていたのでしょうが、この日は誰もいませんでした。

鹿磯漁港の防波堤です。激しい隆起の為に、防波堤のコンクリートは、最下部まで露出し、さらに港の底にあった砕石まで陸化しています。

漁船を係留する桟橋も、鉄筋が露出し、更に漁港の海底が完全に見えてしまっていました。とても漁船を横付けできる状態ではありません。

（グーグルマップ／2023 年 9 月）

この船着き場の震災前の写真です。かなり大型の漁船が直接横付けされています。現在、この大きさの漁船が入れば、間違いなく座礁してしまうでしょう。

ほとんどの漁船は陸上げしたまま使用されていませんでした。しかしこの漁港の中央にあるやや大きな漁船は、そのまま動けなくなっているようでした。

（グーグルマップ／2023 年 9 月）

およそ同じ位置から見た、震災前の漁港の様子です。右側の白い「防波堤灯台」（鹿磯港新防波堤第一灯台）と、左側の防波堤の赤い「灯標」（小規模の灯台）の位置（海面からの高さ）を見ると、隆起の大きさがよくわかります。

鹿磯漁港は震災による隆起の被害が最も大きかった港です。しかし、隆起だけでなく港湾設備そのものも被害を受けています。これは海産物の陸上げ場の屋根ですが、瓦が崩れたままになっていました。